

“2023 公開講座”

セウォル号事件と社会的記憶



2023.10.31

金翼漢

目次

01 / セウォル号事件



02 / 記録と記憶



03 / 社会的記憶のために



“なぜセウォル号事件を記憶するか”

“セウォル号を記憶することは私にどういう意味か”

“セウォル号の記憶共同体は可能なのか”

1.セウォル号事件

□ 4.16 その日の記憶

- 実時間放送 / 全員救助との誤報
- 生存者の数の誤報
- 珍島行き / 大きくなり続ける不安
- 茫茫大海 / 何隻しかない小さい船



□ 珍島での体の記憶

- ‘難民’
- 国家から捨てられた存在
- 私の子供は“数字かあるいは大型画面に登場する人相と着衣に過ぎない”

- Bessel Van Der Kolk, 『体が記憶する』

“体には……トラウマの記憶が……暗号化され残る”

1.セウォル号事件

- 生きている記念碑としての生きと闘争
 - 珍島大行進
 - 特別法/賠償
 - キャドル集会/弾劾
- 記憶する体に基づいた共同体
 - 過去の日常へ?
 - 記憶共同体の新しい歴史
 - 民衆、共同体の意味



“遺族たちは……弾劾が解決を意味するものではないということを……よく知っている。あまりにも明確な課題が3年以上解決されていないことをよく知っている。まだ子供たちの遺骸は8ヶ所にバラバラに分かれていて……子供を亡くした親の震える心臓と疲労に疲れた手足は、韓国社会で心から哀悼されなく、また慰められないまま捨てられている”

2. 記録と記憶

□ 政府の記録破壊

- ISO15489 説明責任, 情報の交換
- 政府は操作、秘匿、無断破棄で記録の説明責任の基本機能を破壊
- 歪んだ記憶の形成の図り
- 海洋水産部の報告書、航跡データ操作
- キム・ソクギョンの発言、卑劣な知識操作行為
“500人、139人、12人”
- 不通、情報共有遮断継続
- 説明責任を果たさない「記録のない国」

□ 記録実践主義(archival activism)

- 隠そうとする政府、必ず残そうとする遺族
- ウォール街占領運動のように市民、遺族の記録実践主義が自然に発現

“記録があつてこそ記憶が長くできます。記録があつてこそ、人々と記憶を一緒に分かち合えます。記録を残してこそ大勢が長続きします”



“なぜ彼らはあれほど苦勞してまで記録を残す必要があつたのだろうか。なぜまた別の人々は記録を密かに、さらには組織的になくそうとしたのだろうか”

2. 記録と記憶

□ 4.16記憶貯蔵所

- セウォル号 惨事市民記録委員会
- セウォル号を記憶する市民ネットワーク
- 遺族、市民、専門家参加型アーカイブ
- 教室と記録、ユネスコ記憶遺産登録の試み
- 口述と「心の記録」



□ 記憶の現在化、意味化

- 記録を通じて記憶を召喚
- 記名/保存/再生のサイクル
- プルースト、ベンヤミンの記憶と時間
- “今この瞬間も2014年4月16日に生きています”
- 闘争の道に立って子供に恥ずかしくない親になることを誓い
- 遺族にとって記憶を現在の人生を意味化する価値のあるもの

“遺族たちは…収容所の残酷さと苦痛の実状を生涯を通じて多数の本で証言したプリモ・レヴィのように、韓国社会に向かってセウォル号惨事と人間の問題をありのまま証言している”

3. 社会的記憶のために

□ 「難民」としての遺族共同体の出発

- 同一視/依存感情/役割感情
- 珍島阿修羅場からクラス別区画、代表
- 共同善と尊厳から出発しなければならないにもかかわらず、国家は収容所の野蛮再現
- テント、コンテナ、「国のない家のない難民」



□ 記憶共同体の可能性

- 捨てられた孤立感、溶けにくい
- クラス別会合開始、「党職」
- 工房、木工房
- 4.16合唱団
- 4.16 家族劇団黄色いリボン



3. 社会的記憶のために

□ 4.16記憶教室が語ること

- 京畿道教育庁の記憶教室強制移転の試み
- 毎日のように寒さに震えながら教室存続のためのピケッティング
- 教育問題に関する限り、社会的、個人的省察がまだ行われておらず
- 利己心の剣舞



□ 社会的記憶に向かって

- 2016年8月、京畿道教育庁安山支庁別館に移転
- 2020年12月、416民主市民教育院内に記憶教室を開院
- 民教育:体験中心、記憶と共感力
- 生徒教育:記憶で希望を描く、記憶教室探訪後の学習共同体
- 記憶と約束の道
- **記憶貯蔵所所長、事務局長遺族担当**
- 記憶教室訪問者案内ドーセント役割遺族が進行



[416 希望木工協同組合口述]



[416TV口述訪問]



[口述証言録100冊 その日を語る]



[展示プロジェクト約20回、子供たちの部屋など]

3.社会的記憶のために

遺族共同体運動は……むしろセウォル号惨事を韓国社会の本質問題として記憶しようとする人々を中心にした新しい形態の「記憶共同体」に成長する可能性を開いてくれた。

この「記憶共同体」が安山の地域共同体で、全国で進められている村共同体にその響きを拡張させていくことこそ、セウォル号惨事以後、韓国社会が到達しなければならない新しい共同体的実践のモデルではないか。

その中心に遺族が立っているように、韓国社会の運動の新しい地平にもセウォル号惨事の記憶と4.16精神が位置することが忘れないという社会的約束を守る道ではないだろうか。

省察と小さな実践

